

発行所(郵便番号100)
東京都千代田区丸の内2-4-1
丸ノ内ビルディング781号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel (212) 4007・1447
編集責任者 中嶋 博
印刷所 関東図書株式会社
定価200円(年間購読料参千円)
1988年7月25日発行
第20巻 第7・8合併号
(毎月1回25日発行)
昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol. 20 No. 7・8 合併号

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi-Bldg., No.781. Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan.

労働時間の短縮と「スウェーデン式ワークシェアリング」

Reduction of Working Hours and The "Swedish Model of Work Sharing"

評議員 東海大学教授 永山泰彦
Prof. Yasuhiko Nagayama

対外経済摩擦の中で、わが国の勤労者の「働き過ぎ」が問題となっている。事実、昨年のわが国勤労者の年間総実労働時間は約2150時間で、OECD主要諸国平均の約1800時間よりも年間で約300時間も長く働いたことになる。とくに、失業に対応するためにワークシェアリング政策をとっているフランスや西ドイツでは、1650～1660時間であった。そこで、わが国で労働時間の短縮が重要な政策課題としてとりあげられ、5年後には現在の主要OECD諸国並みの年間総実労働時間1,800時間台の実現をめざし、今年4月から労働基準法が久しぶりに改正された。

しかし、この問題は今後21世紀に向って高齢化が急速に進展する将来をふまえ、総合的な視点から考える必要がある。

スウェーデンにおける年間総実労働時間(常用勤労者・製造業)の推移をみると、1960年には日本の現在と同水準(2140時間)であった。その後、週休二日制の普及とか年次有給休暇の延長(年間5週間)が、70年代までに導入された。また、1960年代後半から、73年の期間には、週45時間労働制から週40時間労働制になり、この間に年間総実労働時間は1800時間に短縮した。現在では、他のヨーロッパ諸国同様に、週35時間労働制を目差している。

スウェーデンにおける労働時間の短縮で興味深い点は、勤労者の生涯労働、男性と女性間で、一種のワークシェアリングが行なわれていることであろう。スウェーデンの労使は、EC諸国のよう

に、失業を少なくするのを目的とするワークシェアリングは公式に実施しないと宣言している(例えば、1982年のLOの大会宣言)。しかし、実質的に、60～70歳の高齢者、16歳以下の若年者および子供のある母親などの間では、ある種のワークシェアリングが行われている。

スウェーデンの雇用形態をみると、全女性勤労者の45%はパートタイマー(日本は約22%)、男性では7.3%(日本では4.8%)がパートタイマーである(1983年、日本は86年)。スウェーデンのパートタイマーは、社会保障などの雇用条件は常用の被用者と変わらない。この点が日本のパートタイマーと基本的に異なる。

日本では、特定の層、とくに30～50歳代の男性に仕事が過度に集中し、女性や高齢者は、あまり責任のある仕事(やりがいのある職)が見つからず、暇をもて余している人が多いのも現実である。今後、急速に高齢化が進展する社会としては、あまり賢明ではない。スウェーデン方式を研究する価値があるように思われる。

目次

労働時間の短縮と「スウェーデン式ワークシェアリング」	永山泰彦… 1
スウェーデン印象記	高橋一夫… 2
(Stockholm通信) ストックホルムの住宅難	三瓶恵子… 4
(研究会ニュース) 福祉問題研究会	5
SIP ニュース	6

スウェーデン印象記

Some Impressions of Sweden

会員 東京都立第五商業高等学校教諭 高橋 一夫

Mr. Kazuo Takahashi

昨年の7月22日から8月20日まで、スウェーデンのウプサラとストックホルムに、21日は1日だけヘルシンキに滞在し、8月22日に帰国した。ウプサラ滞在の目的は、ウプサラ大学インターナショナル夏季講習会に出席するためでした。講習会の期間は、10週間、8週間、6週間、4週間である。講義の内容は、スウェーデン語を中心に、スウェーデン文化、スウェーデン文学、スウェーデン芸術、比較教育、現代スウェーデンの社会制度、スウェーデンの家族、現代スウェーデン史、スカンディナヴィア文学などである。私は勤務の関係上、7月19日開講し、8月14日に閉講の初級スウェーデン語と比較教育を学ぶことにした。ただ残念なことに勤務の関係で出国は22日10時となったため、講義に出席したのは、23日となった。1日の授業開始は早朝8時から、終りが夕方4時すぎである。午後の比較教育の授業は、後半では、私たちの要望も入れ、教育・訓練関係の施設見学となった。郊外に出かけたため、帰りが6時、7時になることもあった。ウプサラ大学での講習会のあとは、ストックホルムを足の向くまま見学した。私にとってスウェーデンを訪ねたのは2度目である。1度は、家族3人で旅行会社の北欧ツアーに参加し、ストックホルムに1泊した。ヘルシンキ、ストックホルム、ノルウェー（氷河、フィヨルド海岸沿、オスロ、ベルゲンなど）、コペンハーゲンを足早に垣間見、北欧の美しさに心を惹かれた。

今回は30日間という短い期間であるが、自分自身で生活し、自分の足で歩き、スウェーデン社会について考える機会となった。いくつかの感想を述べたいと思う。

7月22日成田を出発、ヘルシンキ着は5時頃であった。機上で知り合った日系スウェーデン人とフィンランドのエスペラント仲間を訪ねるという中学校の先生と別れたあと、中距離用の飛行機に乗り換え、時差1時間のストックホルムに着いた。アルランダ国際空港からウプサラ駅までバスを利用した。翌日ウプサラ大学の広大なキャンパスに

足を踏み入れた。数日授業に遅れたため、困惑もあったが、幾人かの学生や事務当局の好意、また初級クラスの先生や仲間に温かく迎えられた。ウプサラに着いた頃は、夜半の11時頃まで明るく、朝の3時頃には夜が明けた。最初の1週間は、銀行通り、ストックホルムの宿泊先探し、ウプサラ市見学などで終った。しかし、スウェーデン語の遅れを取り戻すため、買物は構内の生協ですませ、簡単な夕食のあとひと寝をとった。夜の10時頃目覚めてみると寮の向にあるガソリンスタンドの明りは、周囲の明るさのため光が冴えなかった。紅茶を飲み、薄明りの外を眺めながら当日の復習を始める。異国の6畳程度の部屋で生活してみると、家庭や仕事からの解放感と同時に、独特の孤独感を感じた。朝はサマータイムのため1時間早くなっている。2時や3時頃明るくなるスウェーデンを見て、この制度の意義も納得できた。ウプサラ郊外からの通勤は、自転車利用が多いようである。市職員なども私が登校する頃は、既に路上で仕事をしており、労働意欲を問題にする話を読むことがあるが、密度の高い仕事をしているようだ。早朝の明るさと夜更けの遅いのも8月の中旬頃までで、帰国する頃は、日に日に夜が長くなるような気がした。短い夏と長い冬というスウェーデンの風土から生まれた社会制度というものを実感することができた。

3週目のヴァムランドツアーの帰りの出来事であった。周囲は大部暗くなり、荒野の地平線に太陽が沈みかけていた。1度講義の間に紹介されたスウェーデンの民謡のプリントが私達に配布された。車のスピーカーから音楽が流れると一斉に若者たちは歌い始めた。世界各地から集う若者たち。アメリカ、イギリス、西ドイツはもちろんのこと、メキシコ、タンザニア、ポーランド、チェコスロバキア、コロンビア、パキスタンなど発展途上国や社会主義国の若者たちも含めて、車中の若者たちがひとつになり、スウェーデン民謡を合唱した。何故このように世界はひとつになることができるのに、地球上では戦争が絶えないのだろうか。こ

の青年たちに銃を取らせてはいけない。この青年達同志が争うことがあってはならない。なかなか沈もうとしない夕日を車窓から眺めながら、頬に涙が伝わるのを感じたのでした。スウェーデンのこの日没は、私にとって生涯忘れることの出来ない光景でした。

私の今回の目的のひとつは、スウェーデンの教育制度を学ぶことでした。昭和59年度に財団法人産業教育振興中央会の援助で、「スウェーデンに



ヴィクス国民高等学校

における職業教育の動向」を研究した。この点一層具体的に現地の状況を知るため、午後のコースとして比較教育のカリキュラムを選んだ。ただ残念なことに、スウェーデンの教育現場は、長い夏休みのため、高校教育の現場を見るができなかった。わが国の学校現場から考えると、学校というものは、常に教師が幾人か登校しており、一部の生徒たちもクラブ活動その他で完全な休暇などありえないのではないかと考えていた。この件スウェーデン大使館に相談した時もし学校訪問を希望するなら、8月25日すぎが良いとのアドバイスを受けていた。長い間日本の学校慣習を当然と思っていた私は、なおも誰れか教員が応待してくれるものと期待していた。担当の教授も私たちの要望に応じたいとあちらこちらの高校と折衝した。幸なことに高校教育の現場は見るができなかったものの、ルドルフ・スタイナー学校、ヴィクス国民高等学校、リンネコムヴィクス成人学校および労働市場トレーニングセンターを訪ずれることができた。特に印象深かったのは、ヨーロッパの古城めぐりにでてくるような豊かな自然環境にあるヴィクス国民高等学校と世界の移民を受け入れ、職業訓練をしている労働市場トレーニングセンターでした。トレーニングセンターでは私たちのため、わざわざ受講生との質問の時間を設定してくれ、スウェーデン社会に対する生の声を聞くことができた。またセンターの設備の素晴らしさと移民に対する十分なスウェーデン国民の配慮も見ることができた。

比較教育の受講者は、U.S.Aの2人、ポーランド、オーストリア、そして私たち日本人の2人の計6人であった。スウェーデンの教育と西ドイツの教育の比較および東ヨーロッパの教育の比較がテーマであった。しかし、私たちはスウェーデンの教育制度そのものも熟知してないため、講義はなかなか進まなかった。講義中の質問は、私たち日本人の2人から投げかけられた。日本人の発想からするとスウェーデン教育の平等主義や教育評価は理解できなかった。他の日本の出席者とは、地域的にも、年齢的にも、性別も違うのであるが、質問の内容と比較教育への関心は全く同じになってしまったため、しばしば互に苦笑せざるを得なかった。根本的には、日本人とスウェーデン人の文化や歴史の相違からくる考え方の相違によるものと言えよう。広い国土と資源の豊かさ、人口密度の少なさ、そして社会福祉制度の充実は、日本における歪んだ教育の競争原理を排除しているのかも知れない。

トレーニングセンターの受講者たちにスウェーデンの所得に対する課税率を質問した。答は異口同音であった。外国の人はスウェーデンの税率をよく問題にするが、実質的にみれば30数%にすぎない。しかも教育は18歳まですべて無料である。子供たちの歯の治療まで無料であることを考えれば、払ったものは返ってくるシステムになっている。決して税率が高いようには思えない。

数箇所教育訓練施設を訪ね、いろいろと話を聞くうち教育の比較というものは、単に学校制度を比較するだけでなく、広く社会システムの比較まで研究しなければならないことを痛感した。

私の第2の目的は、スウェーデンの偉大な経済学者クヌート・ヴィクセル関係の書物を探すことであつた。私の大学時代のゼミナールは近代経済



ミレス彫刻

理論であつた。担当教授は貨幣的側面から経済成長を研究していた。私はその影響で景気変動論やケインズの期待論に関心を持ち、特にヴィクセルの累積過程の理論に興味を持っていた。また彼は、社会思想家でもあり、

スウェーデン社会の女性解放運動や人口問題に大きな影響を与えた。私はウプサラに着いて翌々日から古書店巡りを始めた。ヴィクセルほどの経済学者の本は、すぐに購入できるものと思っていた。意外になかなか発見できなかった。数店回って、やっと高く積まれた古書の中からスウェーデン語版(1956年版)のゴルドルン著「クヌート・ヴィクセル」を発見した。たったこの一冊だけであった。

ウプサラ大学のサマー・セミナーを終えたあと、ストックホルムに居を移した。閑静な広大な芝生のあるストックホルム大も訪ねてみた。大学のキャンパスにある建物は、木が豊富に使われていた。さっそく大学の図書室を訪ねヴィクセル関係の資料を探した。書架には探すことができなかったため、カウンターの方々に相談した。なかなかヴィクセルなる発音が通じなかった。何度か発音し、ヴィクセルの業績と経歴を話す中で、やっと相手は理解した。原因は、彼の発音からするとアクセントの相違だった。カウンターのディスプレイのキーをたたき瞬時にしてヴィクセル関

係の著書を表示してくれた。すべての図書がデータベースに入っており、必要な本の検索が可能システムになっている。カウンター以外にも利用者用に数台のディスプレイが目録カードのキャビネットの横に設置されていた。ヴィクセルに関する書籍はウプサラ市内の書店でも、ストックホルム市内の書店でも見つけることができなかった。

図書室をあとに、ストックホルム大学構内の書店に寄ってみた。経済学書は多く陳列されていたが、ヴィクセルに関する書籍は全くなかった。スウェーデンの生んだこの偉大な経済学者は、学生にとっては過去の学者なのかも知れない。

大学の広いキャンパスに出ると、ボルボの広告宣伝用の飛行船が夕陽の中にゆっくりと浮んでいた。芝生に仰向けになりながら、残り少ない滞在日数を感慨深く思い出した。

8月20日9時にアルランダ国際空港に着き、空港周辺の風景を撮った。天気は晴れており、ポールの旗が風の強さを示めていた。20分前に搭乗し、11時30分ヘルシンキに向かって離陸した。

<Stockholm 通信>

ストックホルムの住宅難

Difficulty to get a residence in Stockholm

会員 三瓶 恵子
Ms. Keiko Kjellsson-Sampeï

ストックホルムに引っこしました。引っこすと決まってから実際に住み移るまで半年かかりましたが、これでもまだ私達は運に恵まれたほうでしょう。この半年間の涙ぐましい住宅探しのこと等について今回は書いてみたいと思います。

一般的な手順としては、まず引っこし希望先のコミュニティの住宅斡旋局 *bostads för medlingen* に連絡をとり、申し込み用紙を送ってもらいます。そこへ家族構成、勤務先、住宅のサイズ、希望地域等を記入し送り返して順番待ちの列に並ぶわけです。ストックホルム、イヨーテポリイ等の大都市とその近郊以外のところではほとんど待たずに住宅を紹介してもらえますが、ストックホルムの待ち時間は信じられないくらい長いものです。家族構成や収入、現在の居住状態等いろいろな条件によって優先権が得られますが、私達の場合を例にとりますと、ストックホルム市内に勤務先があり、幼児がいるという二重の優先にもかかわらず、

最低2年は待たねばならないだろうとのことでした。それがなぜ半年ですんだかという話は後ですることにして、待ち時間の長さの例をさらにあげますと、私の友人で市内のワンルームのマンションに住んでいる夫婦がいるのですが、彼らの場合、自分の住宅を所有していること、子どもがないこと、二人とも収入があること等により優先権がなく、申し込み書をうけとった担当官に「これは年金生活者になるまでは無理そうだからあきらめなさい」といわれ、不自由をしのびながらせまいところで暮らしているという例があります。具体的数字でいえば、彼らのように優先権がない場合は20年近くかかるということです。

ここで背景をちょっと説明しますと、住宅斡旋局で紹介するのは公私両方のアパートで、マンションや一戸建の家は住宅斡旋局を通さずに不動産屋を通じて、あるいは直接に、購入することができます。マンションや家の価格自体は日本に比較

するとかかなり安いのですが、ローンの利子が高い（マンションの場合約9～15%、家の場合約6～10%）ことと、マンションの場合は居住組合費（アパートの場合の家賃とほとんど同額）が高いので、長期的見通し（失業しないか、離婚しないか、子どもがたくさん産まれないか等）がないとなかなか購入にふみきれないようです。

一方アパートの方は、公私ともに公共の斡旋局を通さないと貸せないことになっています。5年前私達がエーレブローからイヨーテボリィに引っこした時にはまだ私設のアパートは独自に入居者を募集することが許されていたので、そういう一つをみつけてすぐに引っこすことができたのですが、その直後に法律がかわったようです。で、この制度は需要と供給のバランスがとれていれば、不公平のないよい制度なのでしょうが、現在のストックホルムのように住宅の絶対数がたりないという時は、住宅を探す方にとっては実に融通のきかない官僚主義に思えます。

でもこの制度には公式には二つ、非公式には一つの抜け穴があるのです。公式の抜け穴というのは変ないいかたですが、そのうちの一つは、私企業が公的補助金をうけないで自身でアパートを建てたり、改築した場合です。そのような場合は斡旋局を通さず独自に貸し出すことができるとされています。私達も幸運にも新聞のすみに載ったこのような広告のうちの一つをみつめて申し込み、半年後に（まだ外側は工事中）入居することができたのです。

公式の抜け穴のうちもう一つは、アパート交換というやりかたです。これはまず店子どうしが交換の相手を見つけ両方の家主がオーケーすれば引っこしができるというもので、私達も半年間毎日このような交換希望の新聞広告を探したものです。

非公式の抜け穴というのは、非公式といっても公然とまかり通っているのですが、いわゆる又貸しです。外国で1、2年仕事をするとか、他のところ

で学生生活をおくるとかいう理由でこの又貸しをする場合がありますが、その際の家賃は貸す方のいいなりで、実際の家賃と又借りをする人が払う家賃の差額で暮らしている人もいるという話です。

これらの背景の裏に実はまだ公然の秘密があるのです。それはいわゆる裏金を払うということで、私達も何度か頭を悩ました。半年間に三回ほど私達も新聞にアパート交換希望の広告をだしたのですが、かかってくる電話はまず「おたくはいくら払うの?」ときいてくるものばかりでした。まあこれも最初から堂々と金額をいって請求してくるのはまだかわいげがあるので、最初はそのようなことはおくびにもださず交換の最終段階になって急に裏金をせびり出すというのもあって、私達もノイローゼになりそうでした。

ストックホルムの住宅難については以前から衆知の事実で、テレビでもそれを題材にしたドラマが放映されたりしています。アフトン・ブラーデット Afton bladet 紙によれば、ストックホルムのアパートは1平方メートルにつき2000クローナの“黒い金”に相当するのだそうです。たとえば50平方メートルの2DKのアパートをみつけようと思ったら、70000クローナ（約210万円）は裏金を用意しておかねばならないということになります。ストックホルム住宅斡旋局の計算では、年間5000～10000戸のアパートがこの“黒いマーケット”でうられているのだそうです。

また、アパート入居者組合 Hyresgästernas riksförbund がルンドの研究者に依頼した調査によれば、スウェーデン中で約100000人が“又貸し”のアパートに住んでいるとのことでした。

スウェーデンにおけるアパートとマンションの割合は約7：3になります。住宅政策におけるアパートの問題は大変大きいものでしょう。

（参考：Aftonbladet紙 1988-5-25付
Expressen紙 1988-5-24
Dagens Nyheter紙 1988-6-4）

研究会ニュース

福祉問題研究会

去る6月16日に当研究所において、このほど来日されたストックホルム大学客員研究員の竹崎孜先生に、「スウェーデンの最近の家族制度をめぐって」と題した講話をお願いした。

ご講話では、スウェーデンの最近の家族制度に関し、その構造上、機能上、法制上および社会政策上の諸点につき詳細な事情の解説が行われたが、なかでも、スウェーデンの同棲法の成立事情は参加者にとり極めて興味ある情報であった。

1988年度ノーベル賞賞金額は250万クローナ

ノーベル財団の発表によると、1988年度のノーベル賞賞金額（各賞当り）は、昨年度の15%増、250万クローナ（5,500万円）であるという。また、財団の資産の市場価値は1987年度に、58%増12億8,700万クローナ（283億1,400万円）に達した。収益は29%増3,400万クローナ（7億4,800万円）であった。主として五つの事務所の資産売却で生じた昨年度中の資本利得は5億2,700万クローナ（115億9,400万円）であった。

中央統計局による博士号取得に関する統計調査

あらゆる種類の統計をとる政府機関であるスウェーデンの中央統計局スタティスティクス・スウェーデン（Statistics Sweden）が、此の程、アカデミックな分野、とりわけ博士論文の生産にその関心を向けた。

スウェーデンでは、1985/86年度に約1,000の博士論文が生産されたといわれ、中でもウプサラ大学の論文生産数は230と傑出していた。論文の3分の一は医学論文で、15%が技術関連のものであった。博士論文の執筆者は、平均して、その目標達成のための研究に7.5年を費している；医学の分野では5.5年、美術系の大学院生は最高で11.5年を要していた。資格取得時の平均年齢は35.5歳であったが、女性は男性に比して、その年齢が2歳程度上であった——この2年間で、普通の家事労働のために費されたとする大胆な推論もある。

中央統計局はまた、博士号取得という榮譽をめざす女性の数が持続的に増加していることを指摘している。すなわち、1985/86年度の博士号取得者の24%が女性で、この比率は過去8年間で6%の伸びを示していた。ただし、博士号取得者に女性が占める割合は、扱う論文のテーマによって非常にバラツキがあり、例えば、美術関係では提出された博士論文の50%が女性によるものであったが、医学論文、社会科学系の論文になると、この比率が各28%、24%に下降する。数学・科学論文となるとこれがさらに18%に下がり、技術科学系の論文となると女性の執筆したものは全体のわずか9%にすぎなかった。

政府の環境法案、1995年までのフロン放出の漸次廃止を要求

此の程、国会に提出された環境に関する政府法案が可決されれば、フロン（CFC）の使用が1995年までに漸次、廃止されると共に、現行の放出水準が3年の間に今の2分の1程度に減らされることとなる。環境エネルギー相ビルギッタ・ダール（Birgitta Dahl）によれば、同法が施行されることで、スウェーデンは国際的に合意された水準を大幅に凌駕する水準を達成することとなり、我国は以前の計画を上回るはやさで環境に関する意識の点で極だった存在になるだろうということだ。なお、最も緊急を要する問題は大气並びに海洋汚染、酸性化、地球のオゾン層の漸減である。

イオウ及び二酸化窒素に関する限り、放出量を1995年までに各65%、30%削減することが既に決定している。二酸化窒素の30%減については、達成がとりわけ困難なため、政府は車の型とサイズによるが1992年もしくは1994年までにトラックとバスに排ガス浄化を義務づけることを希望している。なお締切前に新法規に従う用意のある企業のために総額4億5,000万クローナ（99億円）が、交付される見込みである。

新法案はこの他、次の様な項目を包含している——燃料オイル中のイオウの最大制限レベルやゴミ処理工場からの二酸化窒素の放出量に関する規制の強化；世紀の変わり目までのイオウ放出量の75%カット（ただし、二酸化窒素の削減幅は30%で変らない。）；放出許容規則の強化；企業家の管理責任の増大等々。因みに、新法への重大な違反は禁固刑に処せられる。

農業省が提出した法案は、耕地から浸出する窒素を2000年までに50%削減することを目的としているが、この目標は動物と土地の比率や天然肥料の散布に関する削減、耕地からの浸出をできるだけ長く最小限にいとめる意識的努力によって達成されよう。

また、今後3年間でよりよい環境づくりのための牧草地や野原の保存、代替地耕作法、飲糧水や食料管理といった施策のために総額2億1,000万クローナ（46億2,000万円）がイヤーマークされている。

政府は、汚染原因となる技術の使用を最小限にし、不可避の場合はそれを償うような料金システムの実現可能性を調査するための委員会の任命を提案している。